

れいわ難病議員のそばで、「改革」の現場を日々、体験 —— 新聞記者からALS議員秘書に転身した蒔田備憲さん



船後議員のそばでPCを操作する蒔田さん

「船後さんの秘書、やってみない?」。昨年8月、知人から突然、こんなメールが届きました。知人はALSの患者活動に長く携わっている人。取材をきっかけに10年近い交流がありましたが、私は船後氏に会ったことも、取材をしたこともありません。誘いに驚いた一方、次の瞬間には「面白そう」という気持ちになりました。やりがいのある記者という仕事を離れることは本当に悩みましたが、この「面白そう」という気持ちに押され、転職をすることになりました。

ALSを発症すると、全身の筋肉が徐々に動かなくなります。原因は不明で、治療法もありません。人によって進行度は様々ですが、発症から数年で自力の呼吸が難しくなるといわれています。国内には約1万人の患者がおり、国の医療費助成の対象となる「指定難病」になっています。船後氏は2000年に診断され、02年に人工呼吸器を装着しました。現在はわずかに動く顔の筋肉を使い、瞬きなどでコミュニケーションをとります。

船後氏自身とのかかわりはありませんでしたが、ALS患者との交流は長くありました。毎日新聞入社数年後から、障害や難病のある人が直面する生活上の困難さに関心を持ち、単発の記事を書いたり、企画をしたりしていました。佐賀支局勤務時代(2010～14年度)には1年9か月にわたり、難病患者の日常を伝える「難病カルテ 患者たちのいま」という週1回の連載を一人で担当しており、何人ものALS患者と出会いました。そうした経験を知っていた知人が、声をかけてくれたのでした。

(中略)

国会に入ってつくづく感じるのは、大多数の国会議員というのは健康で、24時間でも働ける体力がある「スーパーマン/ウーマン」の集まりだということ

とです。そうした環境だからこそ、船後氏のような「規格外」の存在がいる価値があると思います。こうした活動は、船後氏や同僚議員である木村英子氏のためだけのものではありません。船後氏がほかの健康な議員と同等に活動できる環境を整えることで、障害者だけでなく、けがをした人、子育て中の方や、持病のある人も、国会で活動できるのだという土台作りになるのだと感じています。

障害者はこれまで、「社会に迷惑な存在」という偏見・差別を向けられながらも、社会のなかで身をさらし、「当たり前で生きる」大切さを訴え、世の中を変えてきました。船後氏の国会活動もまさに、こうした営みの延長線にあると感じています。この一步一步が、多様性のある国会、ひいては社会につながるはずだと感じています。

議員秘書の仕事をはじめてから常に、心がけていることがあります。公設秘書は国会議員の手足となって働く仕事ではありますが、立場としては「公務員」。ただ単に、目の前にいる議員のためだけに働くことだけではなく、議員活動のサポートを通じて社会に貢献するのが役割だと感じています。地方支局と社会部しか経験していない自分にとって、国会はほとんど未知の場で失敗ばかりですが、新聞記者時代の経験や挫折を生かし、多様性ある社会の実現に少しでも貢献したいと考えています。

(2020年10月26日)



参院文教科学委員会で

☆プロフィール☆

蒔田備憲(まきた まさのり)さん
1982年生まれ。神奈川県出身。筑波大学卒業後、2005年毎日新聞入社。大津支局、富山支局、佐賀支局、水戸支局、多摩総局、東京本社社会部。著書は「難病カルテ 患者たちのいま」(2014年、生活書院)。

「東京毎友会」のWEBサイトより、一部を省略して転載。

史上初

重度障がい者の国会議員 誕生で変わることに

誰も切り捨てられない
社会をつくるために

講演と対話



話す人

まきた まさのり
蒔田 備憲 さん

ふなごやすひこ

- ◆ 筋萎縮性側索硬化症(ALS)の参議院議員・船後靖彦さん(れいわ新選組)の秘書
- ◆ 元・毎日新聞記者、2010年～14年に佐賀支局勤務



参議院文教科学委員会で船後議員の質問を代読する蒔田さん(2019年12月5日)

とき **12月20日(日)** 午前**10時**～12時

ところ **メートプラザ佐賀 多目的ホール**

参加費(資料代) **300円**

★当日は、手話・文字情報(UDトーク)を準備します。その他の要望もご相談ください。

主催 蒔田備憲さんを囲む会 連絡先 090-3015-5676 メール kakomuk@gmail.com

※ 新型コロナウイルス感染防止の対策として、お名前・連絡先を添えて、できるだけ事前にお申し込み頂きますようお願いいたします。